

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

1 4 回 成形器の考察と1本取りと2枚合わせゴディの違い

「もっとウキを知りたい！」の第14章は、「成形器を使うとウキの自重が増える」、「2枚合わせは接着材を使用するので、1本取りの方がオモリを背負う」、といった昔から定説となっている事象について、実験を通じて検証していただく。

成形器を使用した場合のウキの自重の変化

よく成形器を使用すると、中綿の空気が圧縮され、自重が増加し、オモリ負荷量が減少するという話しや記事を見かける。この事象について、検証してみた。

私が製作する「尽心作 匠」の場合、羽根の径を揃え、成形器を使うことにより、常に均一したウキを作ることを試みている。

ヘラウキ作りにおいて、様々な治具は工程をやさしくするとともに、精度の向上にも役立つ。

P-1



成形器各種

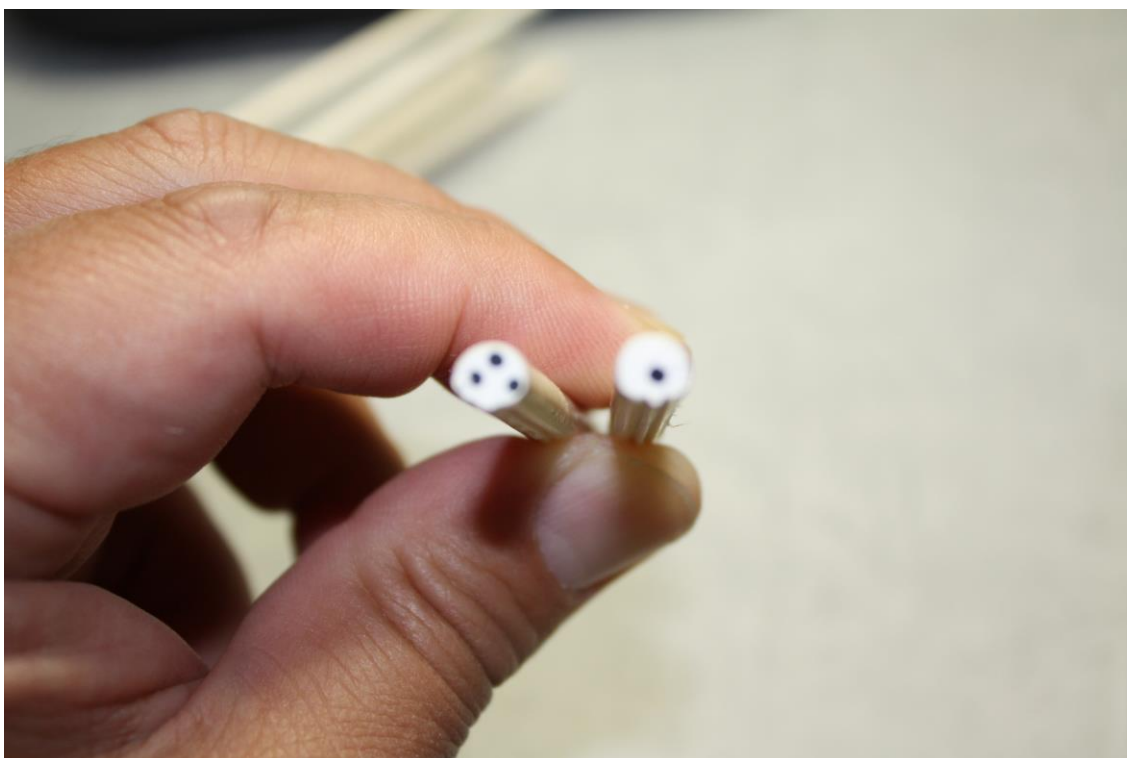
前提：

2本の孔雀の羽根の同じ当たりの部位から、5.5mm径50mmを切り出す。

1本は手と糸を使って成形し、もう1本は成形器を使用して成形した。1本取りウキとし

て、ウキの自重、オモリ負荷量を比較した。

(1) 素材段階：孔雀の羽根



P-2：素材段階

(2) 羽根素材以外の重さ比較、脚：0.06 g + 中芯0.06 g + トップ0.04 g (ただし、中芯は後でカットするので、自重は変わる。)、(A)、(B)とも同重量のものを使用



P-3 : カーボン脚、ポリカーボ細ストレートトップ、ガラスソリッド製の中芯

(3) 成形、(A) は手と糸で絞り、成形、(B) は成形器を使用



P-4 : (A) を手で絞っているところ



P-5 : (B) は成形器を使用



P-6 : 写真下側が (A)、写真上側が (B)、(A) は上部の絞りが甘いため、その後も糸を巻いたり、ほどいたりして、クセ付けを継続した。

(4) 塗装前の自重比較、2本で、0.56 g、1本で0.28 gであることから、2本とも0.28 gであることがわかる。



P-7 : 塗装前の状態、2本で0.56 g



P-8 : 塗装前の状態、1本で0.28 g、従って、2本とも0.28 gであることがわか

る。

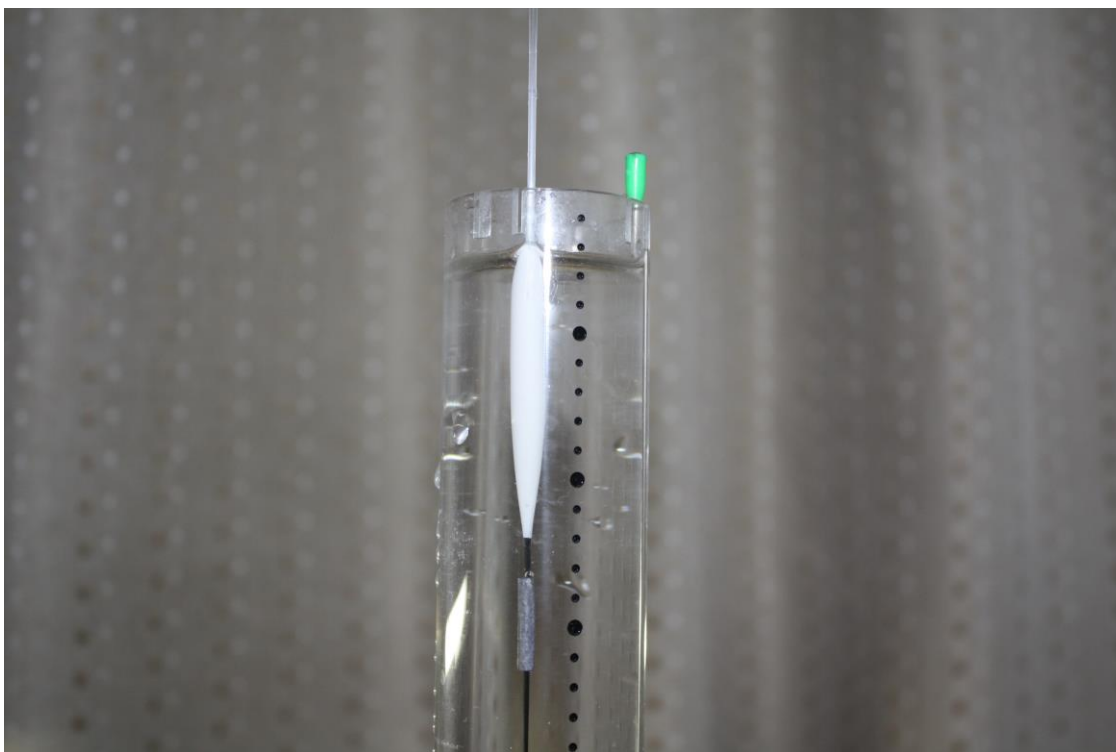
(4) オモリ負荷量の測定、尽心作では、下塗りが終了した段階で、トップ付け根で合わせたオモリ負荷量を測定している。



P-9 : (A) について下塗りが終了した段階で、トップ付け根で合わせたオモリ負荷量を測定



P-10 : 0.56 g のオモリ負荷量



P-11 : (B) に同じ板オモリを巻くと、同じくトップの付け根でつりあった。

(5) 完成後の自重比較、2本で、0.74 g、1本で0.37 gであることから、2本とも0.37 gであることがわかる。



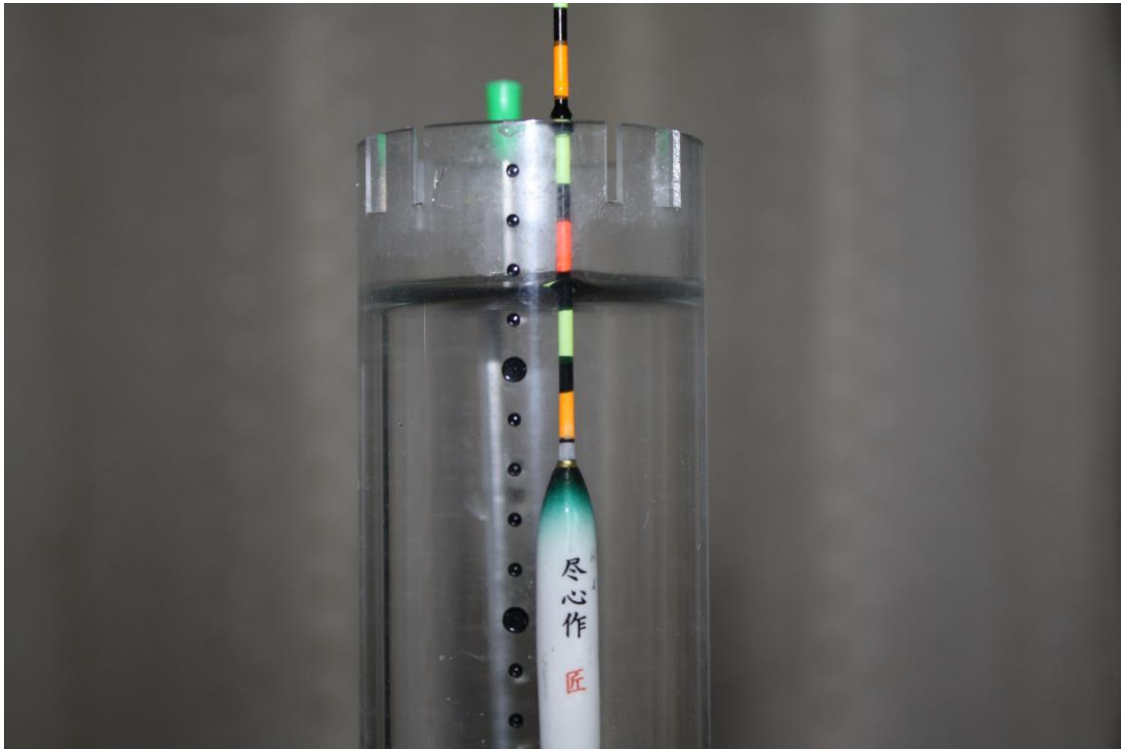
P-12 : 完成後の状態、2本で0.74g



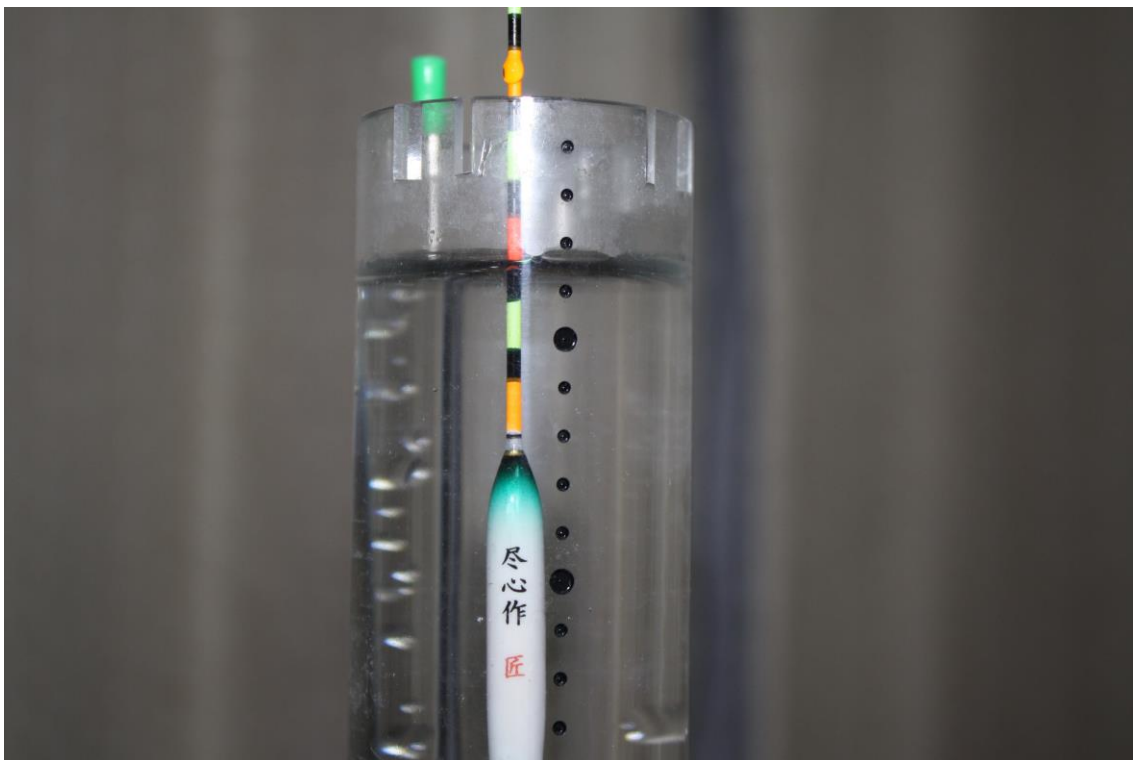
P-13 : 完成後の状態、1本で0.37g、従って、2本とも0.37gであることがわかる。

(6) 最終のオモリ負荷量

下塗り5回目が終了した時点で測定した0.58gの板オモリを脚に巻いてみる。



P-14 : (A)、0.58 gの板オモリを巻くと5目盛出しとなった。



P-15 : (B)、同じく0.58 gの板オモリを巻くと5目盛出しとなった。

最終的にウキとして仕上げた際のおもり負荷量と自重

手と糸で成形したもの : (A) おもり負荷量0.58 g、(B) 自重0.37 g、FW比 (A

÷B) : 1. 5 7

成形器で成形したもの : (B) オモリ負荷量 0. 5 8 g、(B) 自重 0. 3 7 g、FW 比 (A ÷ B) : 1. 5 7

体積が同じで、自重が同じであれば、浮力は同じになる。

製作途中に感じたことは、やはり成形器を使用しないと、1本を作るのにかなりの時間がかかるということである。

特に肩の絞りの部分は、糸を巻いてはほどき、巻いてはほどきの繰り返しで、クセづけにはかなりの時間と精度を要した。

上記テストは、あくまで私の製作する尽心作に限ってのことであり、また、わずか1回のデータサンプルでしかなく、これが全てとは言い切れない。

おそらく、製作者の技量により、かなり異なるということも想像に難くない。

実験方法についても、異論・反論も多くあると思うが、私にとっては、興味深いデータが取れたとも思っている。

2枚合わせと1本取りの違いについて

ヘラブナの微弱なアタリ、エサの溶解過程を明示するために、ヘラウキの形態は、細く長いものとなっている。これは、同容積であれば、反力抵抗を受けにくいように、容積をタテにとるほうが、感度が良くなるからである。

よく釣り人同士の間で、「1本取りと2枚合わせでは、どちらが優れているのか」という議論が交わされているのを耳にする。議論の内容は、「1本取りのほうが、張り合わせる分が少ないことから、接着剤を使用する量が少なく、動きが自然になる。また、接着剤を使用する量が少ないことから、オモリをよく背負う。」「2枚合わせは羽根の良い部分を使用しているので、1本取りよりもオモリをよく背負う。また、センターが出しやすい。」というものだ。

結論から先に言うと、私は上記の論点でいくつかの点は正しいが、いくつかの点は「ウキ製作者により異なる。」と考えている。

具体的考察は次のとおり。

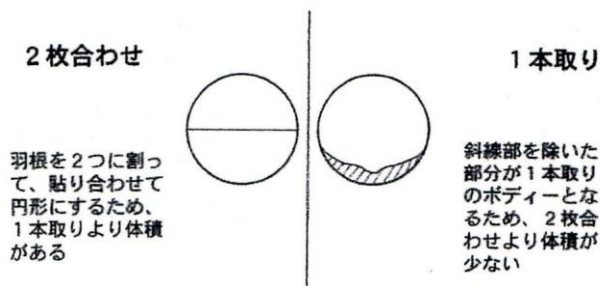
オモリ負荷量は、ウキの体積－ウキの自重＝オモリ負荷量で表わされる。

従って、オモリ負荷量は体積と自重の関係であり、エサの重さを支える力は、トップの体積、つまり太さ（径）と長さである。

ボディの体積で言えば、同じ径で仮定すると、図1からわかるとおり、2枚合わせのほうが多い。

図1 参照

図2 ● 1本取りと2枚合わせの体積



もうひとつの要因である自重は、まさにウキ製作者の技法・技量により大きく異なる。

同じ1本取りでも、上下のみを加工する技法と一旦2つに割り、2枚合わせのように加工し、再度接着するという技法がある。当然、使用する接着剤の量は同じ1本取りといっても後者のほうが多くなる。従って、自重も後者の方が重くなり、オモリ負荷量は減少する。

あくまで「尽心作 匠」に限って言えば、2枚合わせのほうが、1本取りよりもオモリ負荷量は多い。

もうひとつの論点、センター出しに限って言えば、断然2枚合わせのほうが、センターを出しやすい。これは、1本取りは羽根の表と裏（筋が通っているほう）を貼り合わせるが、羽根の表と裏では羽根の硬度が違うため、真ん中に割りを入れたつもりでも、必ずしもセンターがでるとは限らない。また、羽根は自然素材であることから、1本1本硬度が違う。このあたりも、ヘラウキ作りにはアドリブが必要と言われる点である。

接着剤がウキの自重に与える影響について

接着剤がウキの自重に与える影響については、既に「ウキの使い分け・両ウドンの底釣り編」（へら専科2010年12月号）において、ヘラウキ製作工程毎のウキの自重の変化をレポートさせていただいている。

結論から言えば、あくまで私の製作する「尽心作 匠」に限っては、ウキの各パーツ合計重量とパーツ接着後の重量（自重）は、検証からほとんどかわらないことがわかっている。

自重の増加の主な要因はやはり、塗装工程である。

私に限って言えば、できるだけ表面に凹凸の羽根を選別する。半分以上の羽根が選別によりはじかれる。

塗装については、薄くかつ塗りの度に研ぎを行い、下塗り5回、上塗り5回、計10回の塗装を行う。

これにより、軽くて平滑性の高いボディに仕上げる。塗装の良いウキは、消し込みアタリが出やすいという理由もこのあたりにあるのかもしれない。